

## ゴッホ「ひまわり」

フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホという作者は一八五三年三月30日、オランダ南部、ノールト・ブラバント地方のフロート・ズンデルトに生まれました。一八八〇年、ファン・ゴッホは模索の後、画家になる決心をし、ここから、約一〇年間の画業が続くこととなります。最も重要なことは、ファン・ゴッホがこの熱望と苦悩のすべてを芸術と化したことです。このひまわりは一八八八年、作者が35歳の時に書かれました。自分の部屋の装飾として、ゴッホは黄色と水色の背景のひまわりの絵のシリーズを構想しました。抒情的でこれらの歓びの花々の輝きを全てとらえようとする努力があったそうです。

家の中のような建物の中の黄色の机の上に15本のひまわりが入った字の書いてある花瓶があります。ひまわりの花の真ん中には斑点か、花粉が描いてあるのではないかと思いましたが、字は多分、フィンセントと、ゴッホの名前のフィンセントが書いてあるのではないかと思いました。色彩は黄色とオレンジ色と緑色と黄緑色と茶色と黒色を使ったひまわりがあります。描かれているものの仕草は花なのでなく、形状は、元気なものや、真下を向いてしおれているものや、右下、右上、前、左下、左上、右と色々な方向に向いているひまわりです。形状のその理由は、ゴッホは人生の苦悩の全てを芸術化したと書いてあったことから、しおれている花は苦悩を表していて、色々な方向にむいているものはどうしたらいいかわからないことを表していて、上を向いているものは苦悩から救われたいことを表しているのではないかと思いました。作者の意図はひまわりは明るく、元気な感じがして、自分が悲しかったから、苦悩がたくさんあったから、歓びの花を描きたくてひまわりをたくさん描いたのではないかと思いました。

自分が選んだ「ひまわり」と他の年に描かれた「ひまわり」と比べて違ったところは、自分が選んだひまわりのほうが色が明るかったことです。また、他のひまわりだとひまわりの中の黒い花粉か斑点の下に赤い点が描いてあるもの、水色の背景で濃いオレンジ色の机もあるもの、花瓶の下の部分が茶色に塗られているものもありました。ひまわりの花粉と花瓶の上のあたりと花弁と茎が濃く、色が全体的に薄い作品や、ひまわりの数が3本、4本と少ない作品もありました。

ひまわりの花言葉には「憧れ」、「情熱」、「あなただけを見つめる」、などがあり、太陽に向かって花が咲く様子に由来しているそうです。ポジティブな花言葉が多いことが分かりました。

この作品を大きく見ると、細かく、丁寧で、色彩が綺麗で、鮮やかで、一つの色だけで描いてあるひまわりもあれば、色々な色を使ってカラフルに描いているものもあることがわかり、驚きました。

この作品を選んだ理由は、ゴッホのひまわりは、テレビで聞いた、見たことがあったからです。生き生きと鮮やかに描かれていて、元気をもらえる絵なので選びました。

